

▼**四国**

西行庵はどこに

小野 修一 (RNC)

ずっと昔から香川の善通寺市では西行庵の所在地論争があるという。この度、機会を得て取材することになった。

善通寺市には市内中心部と郊外の山里に2つの西行庵があり、綺麗に整備され漂泊の歌人の清貧な生活を偲ぶことができる。ところがこの両庵、実在したかどうかも含めてはつきりしない点が多い。

西行は出家する前、御所を警固する北面の武士だった時、保元の乱で敗れて讃岐に流された崇徳上皇と親交があったとされる。上皇が非業の死を遂げたことを知り、一一六七年頃、上皇の慰霊と念願だった空海の里を訪ねる旅に出て讃岐を訪れた。

上皇の慰霊を終えたのち、西行は空海生誕の地である善通寺を訪れ、境内の近くに庵を結んでひと冬を越したとされる。

その根拠になっているのが、高山の僧侶が善通寺に滞在しているときに書いた『南海流浪記』

という日記で、西行が善通寺をあとにした約70年後に記されている。その内容は「善通寺の南大門の東脇に大きな老松があり、西行はその下で七日七夜籠って歌を詠んだと寺僧から聞いた」というものである。西行の歌集『山家集』には庵の前の老松を詠んだ歌があったことから「南大門の松とは庵の前の松で、庵は善通寺のすぐそばにあった」ということになった。

こうして善通寺近くの玉泉院というお寺では老松の後継松が大事に育てられ、西行庵も復元され名所になっている。



玉泉院の中の西行庵

ただし、南海流浪記については、庵があったと書かれているわけでもないし寺僧からの伝聞でもあり、善通寺当局の名所捏造ではないかと疑う研究者もいる。

一方、山里庵であるがこちらは西行自身が山家集に「大師のおは

しましける御あたりの山に庵むすびて」と書いてあることからそれなりの根拠はある。地元の豪族が別荘の一角を提供したとされ、見晴らしがよく、崇徳院が眠る坂出の白峯御陵も望むことができる。



山里の西行庵



山里庵からの遠景、一番遠くの山並みに崇徳院の御陵がある

白洲正子は著書『西行』の中で、迷ってなかなかたどり着けず、ようやくたどり着いた山里庵を「今

まで見た中では唯一の、そして確かな西行庵の跡だと信ずるに至った」と表している。

地域の人たちも西行さんがこの辺に住んでいたのは間違いないと信じており、西行ゆかりの伝説も多く残されている。しかし、山里庵は伝承が中心というのが弱点のようである。

善通寺市史では「西行は善通寺周辺に数年間滞在し、去ったあとも再び訪れ、2つの庵を拠点にして中四国九州方面へ旅したといわれている」と両方をうまく立てている。このあたりは行政のバランス感覚か。

今回の取材で感じたのは、西行伝説は全国各地にあまたあり、地域の誇りとして大切にされているが、真偽不明のものも少なくない、それだけ「西行ゆかりの…」は鎌倉時代から今日に至るまで「価値あるブランド」であったということだ。善通寺の西行庵の所在地論争について地元の歴史家の一人はこう感想をもらした。

「歴史は確固たる文献が残っていないと、結局、声の大きい方になびいてしまいますからな」
妙に納得した次第である。